

明治七年六月

改正再刻 英史

文部省

正七位大島貞益 纂譯



スエーデン記上

ゼームス第一世 スエーデン王族ニ列リシハヘンリー第一  
門闕ニシテ其英ノ王族ニ列リシハヘンリー第一  
七世ノ妹マルガットヨリ起レリ千五百三年マ  
ルガット蘇王ゼームス第四世ニ適シテゼーム  
ス第五世ヲ生ム其子ハ即チマリニシテマリ  
ダルンリーニ嫁シテ王ヲ生メリ故ニ王ハヘン

リ一第七世ヨリ五世ノ孫ナリ王生レテ僅ニ一  
 歳餘其母廢セラレテ其位ヲ繼キ後大凡三十五  
 年ニシテ終ニ英王ノ位ヲ攝ス是ヨリ前エドワ  
 ルド第一世兵ヲ蘇格蘭ニ弄シニ國始メテ怨ヲ  
 結ヒシヨリ大凡三百年ノ間戦争殆<sub>ト</sub>虚歳ナク生  
 靈干戈ノ禍ニ罹ル者其幾何ナルコトヲ知ラサ  
 リシニ是ニ於テ全島始メテ英ノ管轄ニ歸シタ  
 リ初ヘンリー第七世其妹ヲ嫁スルニ當テ大臣  
 之ヲ諫ムル者アリ王之ヲ納レスレテ曰ク凡<sub>レ</sub>物  
 小ヲ以テ大ニ合スルハ理ノ常ナリ彼王若<sub>レ</sub>我カ

位ヲ繼クコトアリトモ必我ヲ以テ彼ニ加ヘス  
 彼ヲ以テ我ニ加ヘン然レハ英國ノ能ク全島ヲ  
 併一スルハ必コノ婚媾ヨリ始マルナラント是  
 ニ至テ果シテ其言ノ如シ是時王年三十六歳  
 馬王ノ女アンヲ娶テ既ニ二男一女アリ其長男  
 ヲヘンリート云ヒ次ヲキールスト云ヒ女ヲエ  
 リサダスト云フ王幼ヨリ北鄙ニ生長シテ威儀  
 ニ嫺ハス言語蹇澁舉止粗野ニシテ英人ノ始メ  
 テ謁見ヲ得ル者皆望ヲ失ハサルハ無シ王又有  
 名ノ學士ゼオルジ、ボキナンノ教育ヲ受ケテ群

書ヲ涉獵シ自、該博ヲ以テ許シ、カ其學要領ヲ  
 失テ全ク識見ナシニシルリ、ノ侯某常ニ王ヲ目  
 シテ文明國中第一ノ博學愚者ト云ヘリ○千六  
 百三年七月二十五日王空ストミレストルニ於  
 テ即位ノ禮ヲ行フ初、王ノ英ニ入ルトキ蘇人多  
 ク隨ヒ来リシカ是ニ至テ皆爵ヲ得官ニ列ナリ  
 王位ニ即テ未<sub>ダ</sub>三月ヲ出テサルニ新<sub>タ</sub>ニナイトノ  
 爵ヲ得ル者七百ノ多キニ至レリ按スルニ此  
ノ勲爵唯一種ノ文具トナリテ之ヲ然レトモ樞  
賜フニ必シモ驍勇ノ士ヲ擇マス  
 要ノ官ハ大抵舊規ニ因リ其内サリスボリノ

侯セシル首輔タリ此セシルハ即<sub>チ</sub>ボルレノ子  
 ニシテ操行ハ稍、其父ニ遜ルト雖才氣ハ之ニ下  
 ラス王ノ位ヲ得タルハ此人與テカアリ因テ終  
 身其殊遇ヲ受クト云フ○是歲ロルド、コブハム  
 クリ<sub>ン</sub>、マルカム等王ノ從妹アラベルラ、ス左  
 アルトヲ擁シテ密ニ廢立ヲ謀リ其黨類悉、捕収  
 セラルワルトル、ラレ<sub>レ</sub>モ亦此事ニ坐シテ嫌疑  
 ヲ蒙リ王坐スルニ反逆ヲ以テシテ之ヲト<sub>ウ</sub>  
 ルニ幽ス○千六百四年三月十九日議員倫敦ニ  
 聚リテ法教諸律ヲ議定シ又王ノ獨權ヲ以テ入港

ノ飲料諸物ニ税ヲ課スルコトヲ許シ名ケテト  
ノ税ボトト税ト云フ王又議院ニ因テ金ヲ得  
トシ其負中心ヲ王ニ通スル者ニ命シテ其意ヲ  
諷セシカ兩院命ヲ奉セス是ヨリ王意ヲ飾テ會  
中決レテ金貨ノ事ニ言ヒ及サス然レトモ其意  
自ラ平ナルコト能ハス數日ニシテ遂ニ議院ヲ閉  
鎖ス○エリサベス<sub>ス</sub>在位ノ間ハマリノ時ニ放  
ケルカ如キ焚殺屠戮ノ事ナシト雖<sub>モ</sub>教徒ノ虐ヲ  
受クルコト尚多シ故ニ王ノ即位ニ當テ舊教ノ  
諸人其母ノ故ヲ以テ皆翹首シテ新政ヲ望ミシ

モ王亦新教ヲ主張シテ毫モ先王ノ嚴ヲ弛メス  
是時舊教ノ徒ニカテスバイ及ベルレトテニ  
人ノ者アリ一日共ニ時事ヲ談シテ互ニ王ノ苛  
嚴ヲ謗議シ話次ベルレハ微ニ王ヲ刺殺セン  
ノ意ヲ啟スカテスバイ之ニ答ヘテ曰ク王一人  
ヲ殺スモ事ニ益ナシ必根株ヲ絶タントセハ上  
下兩院ヲ併セテ之ヲ除クニ非レハ不可ナリト  
因テ火藥ヲ議院ノ床下ニ埋メ其開院ノ日王以  
下悉ク席ニ臨ムヲ待テ之ヲ爆殺セント云フベ  
ルレ深ク此策ニ與レ必共ニ力ヲ盡サント相

約シテ別レレカ又ゴーイ、ハウクスト云フ者アリ原英國ノ産ニシテ此頃西班牙ノ軍ニ從テ和蘭ニ在リ其人元來豪暴ヲ以テ名ヲ得ルカ故ニ二人密ニ之ヲ英國ニ迎ヘテ密事ヲ告ケ其他數人ニ通知シテ徐ニ黨類ヲ招聚ス時ニ千六百四年ナリ翌年夏賊徒ベルレーノ名ヲ用キテ上院ノ隣ニ一屋ヲ僦シ頻ニ壁下ノ土ヲ鑿開セシカ又上院ノ床下ニ炭窖アリテ假借スヘシト聞キ更ニ此窖ヲ僦シ中ニ火藥三十六桶ヲ填シテ綿密ニ薪柴ヲ其上ニ掩覆ス是年冬ヨリ春ニ至ル

迄公會屢期ヲ愆チ遂ニ十一月初五日ヲ以テ開院ト定マリタリ此間八月ノ久シキヲ經テ之ヲ覺ル者ナカリシカ上院中ノ一頁ニロルドモントイーグルト云フ者アリ會議ニ先タツコト十日其僕一封ノ書ヲ持シ來テ之ヲ捧ケテ曰ク奴忽然此書ヲ得タレトモ何人ヨリ遞與セルコトヲ知ラストモントイーグル之ヲ展觀スルニ紙尾全ク名字ヲ載セス其中言ヘルコトアリ曰ク今回ノ會議神人共ニ合シテ衆惡ヲ罪セントス汝宜シク事ニ托シテ會議ニ往クヘカラス

其禍發スルニ當テ人々其自ル所ヲ知ラスト雖  
 其害實ニ恐ルヘシ汝必余カ言ヲ輕視スルコト  
 勿レト此書何人ノ作ル所ナルコトヲ審ニセス  
 蓋<sub>レ</sub>叛黨ノ一人ヲランシス、ト<sub>レ</sub>シヤムト云フ者  
 モ<sub>レ</sub>ントイীগルト姻戚ノ親アリ且同レク舊教  
 ノ徒ナルヲ以テ暗ニ此書ヲ投シテ其命ヲ救ハ  
 シコトヲ欲セシナリ然レトモモン<sub>ト</sub>イীগル  
 其意ヲ解セス之ヲ以テセシルニ示シ、ニセシ  
 ル亦曉ルコト能ハス是ヨリ又數日ヲ経テ後セ  
 シル王ノ佃獵ニ從テ野外ニ出遊シ談話ノ間偶

然此書ノ事ヲ王ニ語リシニ王忽<sub>テ</sub>蹙額シテ曰ク  
 此必小事ニ非ス蓋<sub>レ</sub>火藥ヲ以テ議院ヲ覆サント  
 スル者アルナラント然レトモ王尚<sub>ホ</sub>秘レテ他人  
 ニ告ケス十一月四日ニ至リ密ニソ<sub>レ</sub>ホルクノ候  
 ヲレテ院下ノ窖ヲ驗セシメレニ薪柴ノ疊積ヒ  
 ルノミニテ別ニ異アルヲ見ス然レトモ傍<sub>ニ</sub>魁  
 偉ノ一男子アリテ其相貌甚疑フヘシ之ヲ問ヘ  
 ハ唯答ヘテバ<sub>レ</sub>レ<sub>レ</sub>氏ノ僕ナリト云フ此夜人  
 定<sub>テ</sub>後官吏再<sub>テ</sub>王ノ命ヲ受ケテ窖中ニ至リシニ  
 以前ノ男子手ニ提燈ヲ携ヘテ又戶外ニアリ因

テ急ニ之ヲ捕ヘ其身ヲ搜索シケレハ發燭及燧  
石ノ類點火ニ須要ノ物悉其壞中ニ在リ官吏愈  
怪ミ害中ニ入テ薪材ヲ斃シ、カ果シテ數十桶  
ノ火藥アリテ掘リ出シタリ翌日王此人ヲ鞫訊  
レテ其實ヲ答フルヲ聞ケハ即ゴロイ、ハウクス  
ナリ然レトモハウクス慨然獨擔當シテ敢ハテ  
同盟諸人ノ姓氏ヲ語ラス唯曰ク恨ムラクハ早  
ク火藥ヲ迸裂シテ讎敵ト共ニ焦死セサリニコ  
トヲト是ヨリ先叛黨諸方一時ニ起ラント約シ  
其中數人既ニ兵器ヲ整ハテワルウキ州ニ在リ

倫敦ノ叛徒ハウクスノ執ハラレシヲ聞テ倉皇  
逃レテ此地ニ至リシカ其數僅ニ五十ニ過キス  
近傍ノ土兵争ヒ起テ之ヲ圍ミ賊徒防戦ノ間其  
火藥忽<sup>テ</sup>火ヲ發シ人々焦爛シテ戦フコト能ハス  
パルン<sup>一</sup>及カテスバイハ一丸ノ為ニ貫射セラ  
レ其餘黨類多クハ擒縛セラレテ各法ニ伏ス○  
王常ニ遊樂ヲ好ミ又屢侍臣ニ寵賚シテ財用給  
セス千六百十年王又稅ヲ賦セントシテ新ニ議  
貢ヲ徵シセシルヲ院中ニ遣テ其意ヲ告ク然レ  
トモニ院ノ獻納スル所寡少ニシテ王ノ意ニ滿

タス是ニ於テ王更ニ獨權ヲ以テ貿易諸品ニ稅  
 ヲ課セントセシカ下院固ク其不法ヲ陳シテ聽  
 カス此頃封建ノ遺習尚存セル者多クシテベネ  
 ボーレンス及モノポリー等ニ解上卷ノ外君主臣  
 屬ノ遺孤ヲ保育スト稱シテ其財產ヲ私シ或ハ  
 菲薄ノ僱錢ヲ以テ驛路ノ車馬ヲ役シ又民物ヲ  
 買取スルニ主者ニ問ハスシテ擅ニ其償ヲ定ム  
 ル等ノ弊アリ議院此等ノ惡習ヲ除カントテ每  
 歲二十万ポンドノ定額ヲ獻シ此數事ニ代ヘン  
 ト請ヒシカハ王初ハ頗ル之ヲ好セシカ翌年二月

其議未決セシテ俄ニ院ヲ閉チ尋テ悉議負ヲ  
 解散ス方今英國ノ議負ハ七年ニ一次改換スル  
 シト雖テ代換ヨリ代換ニ至ル間常ニ公會ヲ設クテ  
 ルニ非スルコトアリメニ至ル間常ニ公會ヲ設クテ  
 ヲ閉ツルコトアリメニ至ル間常ニ公會ヲ設クテ  
 ヲ改換スルコトアリメニ至ル間常ニ公會ヲ設クテ  
 ナリ本文中ルニ非ス唯暫時ノ間會ヲ罷ムル議  
 メテ會ヲ開クヲ云ヒ解ト書スルハ新撰ノ議負始  
 ニ就テ云フ又開クヲ云ヒ解ト書スルハ新撰ノ議負始  
 ル迄ハ明ニ此義ヲ區別セサレハ終乱ヲ生シ易  
 過スル者勿ト勿レ讀○エリイベッスノ末年東印度商  
 社始メテ官許ヲ得テ印度地方ノ通商ヲ開キシ  
 九千六百十一年ニ至リ其年限ノ盡クルヲ以テ



更ニ王ニ請ヒ復官許ヲ得テ始メテ<sup>ニ</sup>シラトニ商館ヲ建立ス此頃王又意ヲ銳クシテ愛倫ヲ墾開シ絶島始メテ開化ノ餘光ヲ受ク○千六百十二年五月セシル死ニ尋テ十一月六日世子ヘンリ一亦歿ス世子幼ヨリ穎悟ニシテ器度衆人ニ卓越シ其死ニ當テ年尚十八歳ナリシカ近臣ノ為ニ畏敬セラレ、事迥ニ其父ニ優レリ○千六百十三年二月十四日王女エリサダスヲ以テ日耳曼國中ラインノ部長フレデリックニ嫁スエリサダス後ニ至テソヒアラ生ミソヒアハノ一ブル

ノ部長オーゴス左スニ嫁シテゼオルジ第一世ヲ生ム即今王ビクトリヤノ祖ナリ○セシル死シテ後ロベルト、カルト云フ者代テ首輔ト為リタリカルハ原蘇格蘭ノ人ニシテ千六百九年ノ頃始メテ朝ニ仕ハ容貌言辭ヲ以テ頗ニ寵眷ヲ蒙リシカ是ニ至テ王之ヲ拔擢シ尋テ又ソメルセトノ侯ニ封ス是時故エダクスノ一子其父ノ爵ニ復セラレテ亦エダクスノ侯ト稱セシカカル登用セラレテ後密ニ其妃ト情ヲ通シテ之ヲ奪ヒ其友トマスオーブレボリーノ諫止スルヲ

改正

九

九

九

九

怨ミテ遂ニ之ヲ讒陷シ後暗ニ獄中ニ毒殺ス既  
 ニシテ千六百十六年カルノ寵衰フルニ及テ其  
 舊惡ヲ訴フル者アリ黨類悉法ニ伏セシカ王尚  
 カルヲ刑スルニ忍ヒス只其官爵ヲ褫テ朝廷ヲ  
 屏斥ス後二人共ニ僻地ニ退キ相仇視シテ身ヲ  
 終フト云フ○千六百十四年四月王又財庫ヲ補  
 ハシコトヲ欲シ議貢ヲ徵シテ之ヲ議セシム然  
 トモ下院命ヲ奉セシテ曰ク先悉弊政ヲ除ク  
 ニ非スハ決シテ輸税ノ事ニ及フコト能ハシト  
 王怒テ直ニ之ヲ解キ議貢未一事ヲ議定セスシ

テ分散ス是ニ於テ王又ベ子ボーレンスノ法ヲ  
 用キ其命ヲ奉セサル者ヲ捕ヘテ之ヲ罰セント  
 セシカ刑法長官コークノ其不法ナルヲ固諫ス  
 ルニ因テ此議亦行レス其後コーク屢王ト法ヲ  
 争辯シ千六百十七年終ニ之ヲ以テ官ヲ去リ後  
 下院中ノ一員トナリテ分争ノ間大ニ其名ヲ顯  
 セリ○千六百十五年ノ頃ヨリ王又ビルリール  
 スト云フ者ヲ寵嬖シテ是ヨリ後數年ノ間此人  
 累遷シテボッキンハムノ侯ニ封セラレ又頗政府  
 ノ機事ニ干預ス此人亦奸佞ノ一小人ニシテカ

ルト同シク外貌ヲ以テ寵ヲ蒙リ其登庸セラレ  
 シヨリ欽譙逸樂朝廷ノ風ヲ為シ朝中ノ故老先  
 王ノ威儀ニ閑フ者ハ皆之ヲ指彈セサルコトナ  
 シ○千六百十八年王大學士ベリコンヲ以テ相  
 國トシ尋テ又セント、アルバンスノ侯ニ封スベ  
 リコンハ其說コト相反スルヲ以テ常ニ王  
 ノ為ニ寵セラレ○ワルトル、ラレニ始メテビル  
 ジニアニ殖民セシ後海ヲ渡リ來ル者多クハ遊  
 情ノ都人士ニシテ其跡一旦珍絶セシカ千六百  
 六年倫敦及プライマウス并ニ會社ノ名ノ二會社更ニ

官許ヲ得テ此地ニ民ヲ移シ是ヨリ英國ノ土人  
 亞墨利加ニ移住スル者日ニ多シ時ニラレハ  
 其前コブハム等ノ不軌ニ連坐シテ罪ヲ蒙リシ  
 ヲリ尚獄中ニ在リ此頃西洲開拓ノ議日ヲ逐テ  
 盛ナリト聞キ唱ヘテ曰クギアナノ内地ニ一大  
 金山アリテ唯己ノミ之ヲ知レリト王聞テ之ヲ  
 信シ千六百十七年ラレノ禁獄ヲ釋キ數隻ノ  
 船ヲ附シテ之ヲ亞墨利加ニ發遣ス然レトモ此  
 事固ヨリ虚誕ノ妄說ニシテ唯幽囚ヲ免ルハノ  
 計ナルヲ以テラレリギアナニ至テ直ニ西班牙

ノ屬地ヲ亂暴シ其一邑ヲ燒テ後一モ得ル所ナ  
 クシテ歸リタリギアナハ初英人ノ檢出ニ係ル  
 ト雖中コロ西人ノ所有トナレリ故ニラレノ  
 發スルニ臨テ英國在留ノ西使之ヲ争ヒシカ是  
 ニ至テ王又西使ノ為ニ責メラレ千六百十八年  
 十二月終ニラレテ西使ヲ殺シテ西班牙ニ謝ス○千  
 六百十八年ボヘミア新教ノ徒日耳曼政府ノ虐  
 ニ苦ミ英王ノ女婿フレデリックヲ奉シテ日帝ヘ  
 ルジナンド第二世ニ叛ス此戰爭後ニ至テ全歐  
 洲ニ波及シ千六百四  
 十八年ニ至ル迄連結  
 結ルハ即是ナリ英人皆謂ヘ  
 ニ三十年ノ戰ト称スルハ即是ナリ

ラクボヘミアハ同教ノ國且フレデリックハ姻戚  
 ノ故アルヲ以テ救援セスンハ有ル可カラスト  
 然レトモ此時王ハ世子チャールスノ為ニ西王ノ  
 女ヲ娶ラント擬シ其議ノ阻閣セラレヘキヲ恐  
 レ且臣民ノ其政府ニ叛クヲ助クルハ不義ナリ  
 ト云テ契然顧ミス國人囂々之ヲ議スルニ及テ  
 僅ニ四千ノ兵ヲ遣テライエンヲ守ラシム○千六  
 百二十一年議負又倫敦ニ聚リ一月三十日會議  
 ヲ開クニ當テ直ニ弊政ヲ討論セシカ既ニシテ  
 又汚濁ノ官吏ヲ淘汰スト稱シロルド、ベールコン

ヲ捕テ其屢苞苴ヲ受クル罪アルコトヲ鞠問シ  
 其狀二十八條ヲ得シカハ遂ニ其官職ヲ褫テト  
 一ウル中ニ幽閉ス其前ベリコン先王ノ朝ニ在  
 テ始テ仕ヲ求メシ頃ボルレリ密ニ先王ヲ諫メ  
 テ曰クベリコンハ奇才アリト雖其才唯文學ニ  
 長シテ政治ニ任スヘキ人ニ非スト既ニシテエ  
 ェクスノ罪ニ陷ルニ及ヒベリコンラレリ等ト  
 共ニ主トシテ其獄ヲ構成レ是ニ至リ又貨ヲ以  
 テ敗ルト云フ然レトモ王其才ヲ愛ミ幾許ナラ  
 スシテ之ヲ獄ヨリ出シ年々若干ノ金ヲ餽テ其

老ヲ養ハシム○是ヨリ先千六百二十年ボヘミ  
 アノ兵大ニプラীগニ破レテフレデもキ單身  
 和蘭ニ遁走シ是歳夏ニ至テ埃兵ラインニ亂入  
 シテ敗報連ニ英國ニ至リシカハ國人愈堪フル  
 コト能ハス十一月十四日再議院ヲ開クニ至テ  
 下院上書シテフレデもキヲ救ヒ且西班牙ノ婚  
 議ヲ破テ世子ノ為ニ別新教ノ女ヲ娶ランコト  
 ヲ請フ然レトモ是時婚議既ニ半ニ至ルヲ以テ  
 王其書ヲ受ケス院中ニ言ハシメテ曰ク朝廷ノ  
 機密ハ汝等ノ得テ解スル所ニ非スト下院之ヲ

聞テ大ニ驚キ固ク其語ノ政體ニ害アルヲ争フニ至リ王又其職ニ踰ユル罪ヲ責メ且其中汝カ曹ノ國事ニ與ルコトヲ得ルハ皆我祖先以來ノ特恩ニ因ルトノ辭アリ是ニ於テ下院一大議論ヲ發シ英國議院ノ權ハ古來政體ノ定ムル所ニシテ決シテ君主ノ恩賜ニ非ルヲ極論セシカハ王大ニ怒テ自其書ヲ衆人稠坐ノ中ニ裂キ尋テ又議院ヲ閉鎖ス王ハ持論專恣ニシテ法律ノ下ニ屈スルコト能ハス居常人ニ語テ曰ク君權ハ神授ニシテ臣民ノ得テ觸ル可キニ非スト常ニ

此論ヲ以テ議院ヲ規スルカ故ニ其議相愜フコト能ハス翌年二月遂ニ又議員ヲ解キセルデン及前ノ刑法長官コーク等ヲ首トシ其他抗論セシ者ヲ執ヘテ獄ニ投シケレハ議員モ亦皆憤々トシテ分散セリ○王既ニ議員ヲ散シテ後世子ノ婚ヲ成シテフレデヨキヲ穩ニ國ニ返シ是ヲ以テ人口ヲ壅カント頻ニ其事ヲ議セシカ忽一意外ノ事ヲ生シ其議殆成ルニ至テ又俄ニ破ル此頃ボッキンハムノ侯ビルリールス威ニ王ニ寵アリ又世子ノ歡ヲ得ンコトヲ欲シ之ニ説テ曰

ク公子微行シテ西班牙ニ至リ西王ト婚事ヲ面  
 議セハ事意表ニ出テ、西王必大ニ悦ハント世  
 子大ニ之ヲ然リトシ強ヒテ王ニ請テ千六百二  
 十三年二人英國ヲ發セシカ其途中巴勒ヲ過リ  
 世子佛王ノ女ヘンリータヲ瞥見シテ其色ヲ悦  
 ヒ且ボッキンハムモ亦西國在留ノ間其大臣ノ為  
 ニ禮セラレサルヲ怒テ二人俄ニ其心ヲ變シ是  
 歳十月英ニ歸ルニ及ヒカメテ婚議ヲ拒ミシカ  
 ハ王止ムコトヲ得スレテ之ニ後ヒ更ニ世子ノ  
 為ニヘンリータヲ娶ラント約ス〇千六百二十

Jaon

四年王遂ニ西班牙ト絶レテ大ニフレデリックヲ  
 援ントシ二月十九日議負ヲ徵レテ其意ヲ演フ  
 ボッキンハム亦院中ニ至テ西國微行中ノ顛末ヲ  
 語り巧ニ事實ヲ驕テ皆罪ヲ西人ニ歸セシカハ  
 議院奮然トシテ直ニ三十万ポンドノ金ヲ備ヘ  
 タリ是ニ於テ是年冬王先ッ六千ノ兵ヲ和蘭ニ遣  
 テ尚盛ニ軍事ヲ議セシカ翌年三月二十七日未  
 其師ヲ出スニ及ハスレテ王病ニ罹テ死ス時ニ  
 年五十九在位二十三年ナリ

モールズ第一世王ハ先王ノ第二子ニシテ千六

百十二年其兄ノ死ニ依テ立テ世子トナリ是ニ至テ其父ノ位ヲ嗣ク王ハ舉止莊嚴ニシテ又躬節儉ヲ務メ其性質大ニ父ト異ナリ但惜ムラクハ先王擅制ノ説ニ浸潤セラレ君タル者ハ固ヨリ斯ノ如クナルヘント自其恠ル、所ニ安シテ疑ハス加フルニ其人ヲ馭スルニ詐術ヲ以テシ信任スル所亦其人ニ非ス因テ遂ニ民心ヲ失ハリ○是歲六月王代者ヲ佛ニ遣テヘンリータノ婚儀ヲ成シ尋テボッキンハムヲシテ之ヲ英ニ迎入セシム○王先王ノ遺緒ヲ繼テ兵ヲ日耳曼ニ

出サンコトヲ欲シ是月始メテ議貢ヲ徴シ、ニ此回ノ貢貢ハ其説大ニ前次ト異ニシテ專革弊ノ論ヲ主張シ僅ニ十四万ポンドノ軍資ヲ納レテ其餘ヲ肯セス會都下ニ疫癘ノ行ル、ニ依テ王會議ヲオキスホルドニ遷シ此處ニテ又頻ニ戰爭多費ノ狀ヲ陳セシカ是時コーク及セルデシ等再議貢ノ中ニ選マレ其他ジーン、エルリオトマス、空ントウルス及パイク等皆雄辯果敢ノ士ニシテ必民害ヲ去ントセハ王ノ窘迫ニ乘スルニ如カスト頑乎トシテ其論ヲ枉ケス既ニシ



テ寵臣ボッキンハム密ニ戦艦ヲ佛ニ貸レテロセ  
 ールノ新教徒ヲ討スト聞キ下院滋憚ハス此際  
 疫癘又オキスホルドニ流傳セシカハ王乃之ヲ  
 口實トシテ八月十三日遂ニ議負ヲ解散ス  
 ハ佛ノ地名ニシテ其國ノ新教徒屢懈將リセリ  
 繁雜ナルカ故ニ外國ノ事蹟ニ至テハ間詳ニ其  
 由ヲ述ヘサル者アリ覽者之ヲ知ラントセハ官  
 版西史綱紀○此時未西班牙ト釁端ヲ開カス故  
 見ルヘシ○  
 二其戦争尚止ムニ及フ可キヲ王強ヒテ少許ノ  
 兵ヲ募リエドワルド、セシルヲ將トシテ之ヲ發  
 遣セシカセシル途中ニカヂースヲ攻テ却テ敗

劔シ大ニ軍兵輜重ヲ喪テ歸リタリ○千六百二  
 十六年二月王又議負ヲ徵ス然レトモ下院前説  
 ヲ固執レテ隻言ヲ變セス王モ亦頑僻ニレテ意  
 ヲ枉ケテ之ニ從フコトヲ知ラス是ヨリ先王屢  
 グリストル侯某ノ不遜ヲ憤リ是ニ至テ之ヲ上  
 院中ニ執ヘントセシカハ侯却テボッキンハムノ  
 惡事ヲ論シ劾シテ曰ク西班牙ノ戰ハ皆其私怨  
 ニ出ツト下院亦其後ニ尾シテ盛ニ其罪ヲ鳴ラ  
 シ、カハ王懼レテ又之ヲ解散ス○千六百二十  
 七年王亦佛國ト怨ヲ構ヘボッキンハムヲロセ

ルニ遣テ其教徒ヲ援ケシム是ヨリ先ボッキンハ  
ム王ノ聯姻ノ故ヲ以テ又佛王ニ結ハントセシ  
カ其相リセリユノ為ニ輕侮セララル、ヲ怒テ王  
ニ勸メテ此舉ヲ謀リシナリ時ニ王議院ニ得ラ  
レヌ且強ヒテ民財ヲ借リ或ハ濫ニ貢稅ヲ課ス  
ト雖其令行ハレス府庫蕩盡シ術計殆窮マリシ  
ニ又無用ノ兵ヲ起シ令下ルニ及テ國人皆愕然  
タラサルハナシ既ニシテボッキンハム兵ヲ率キ  
テロセールニ至ルニ及ヒ邑人侯ノ人ト為リヲ  
疑テコレヲ入レス因テ轉シテレール島ヲ攻メテ

其兵大ニ敗レ其行亦徒ニ下民ノ謗議ヲ増スノ  
ミナリ○諸方ノ征戰悉挫敗シテ國用愈給セス  
千六百二十八年三月王又議貞ヲ徵シ其開院ノ  
日自院中ニ至テ曰ク汝等迷ヲ執テ回ラス命ニ  
背キ職ニ惰ヲハ予別ニ為ル所アリト然レトモ  
是時下院ノ氣勢固ヨリ詹言虛喝ノ得テ威服ス  
可キニ非ス加フルニ此回ノ代貞ハ皆才學膽富  
ノ豪族ノミニシテ直ニ暴政ヲ例舉シ一書ヲ作  
テ之ヲ王ニ獻ス其略ニ云ク願クハ王威カヲ以  
テ強ヒテ民財ヲ借リ或ハ之ヲ奪フコト勿レ議

院ニ由ラスシテ貢税ヲ賦スルコト勿レ妄ニ人  
 ヲ幽囚シ或ハ故ナクシテ之ヲ獄中ニ抑留スル  
 コト勿レ擅ニ水陸兵士ヲ民家ニ屯シテ其財ヲ  
 以テ之ヲ給養スルコト勿レ軍法ヲ以テ平時ノ  
 法ヲ亂ルコト勿レ此等ノ事ハ古來既ニ定マレ  
 ル所ニシテ律書中歷々トシテ明文アリ願クハ  
 王古法ニ循守シテ長ク良君ノ名ヲ保チ臣等ヲ  
 レテ亦不羈自由ノ民タルコトヲ得セシメヨト  
 此間往復尚卑遜ノ語ヲ用キテ議旨未臣禮ヲ破  
 ラスト雖其氣朝廷ヲ吞ミ勢ヲ以テ迫ルノ意既

ニ隱然タリ然レトモ王尚改ムルコトヲ知ラス  
 遁辭ヲ以テ之ヲ亂ラントシケレハ下院大嚷シ  
 テ再舊論ヲ復シボッキンハムノ罪ヲ歷誌セシニ  
 因リ王終ニ逃ル可カラサルヲ知リ其書ヲ取テ  
 律書ノ中ニ増入ス此書題シテベチーミン、オス、  
 ライトト曰フマガナ、カルタ以來ノ大律ニシテ  
 後人之ヲ並稱シテ令ニ至ル迄尊重セリボッキン  
 ハムハ其後王ノ議院ヲ閉ツルニ依テ僅ニ刑戮  
 ヲ免レシカ是年再ロセーニ赴カント八月ニ  
 十三日ポルツマウスニ水軍ヲ調スルニ當リ部

下ノ士ヘルトンノ為ニ刺殺セラル○王既ニ議院ノ請ニ從ヒ新律ヲ立ツト雖固ヨリ之ヲ守ルニ意ナシ千六百二十九年三月王公會ヲ解キ是ヨリ後ハ到底下院ノ屈ス可カラサルヲ計リ心ニ誓テ復之ヲ徵サス爾後大凡十年ノ間或ハ船錢ト名ケテ大ニ海軍ノ費ヲ募リ或ハ強借ノ法ヲ用キテ民財ヲ徵取シ其他中古以來廢絶シタル諸法ヲ復シテ苟モ金貨ヲ得ヘキ術アレハ其醜穢ト殘暴トヲ顧ミス此ノ如クナリケレハ全國ノ人心洶々トシテ百姓ノ怨讟一日ハ一日ヨ

リモ甚レ要シテ之ヲ論スルニ英國貢稅ノ權ハ悉、議院ニ屬スルニ王令議院ヲ離レテ之ヲ徵スカ故ニ舉クトシテ不法ナラサルハナシ蓋、船錢ノ如キハ王實ニ之ヲ海軍ニ用キテ國ノ裨益ヲ為スト雖徵取其法ニ非サルカ故ニ民尚之ヲ憚ハス又王ノ民心ヲ失ヒシハ獨、聚斂ノ一事ノミニ非、ス此頃新教ノ支流ニピリツタント名クル一派アリテ威ニ國中ニ行レ其說稍、國教ト逕庭セシカハ王ロードト云フ高僧ノ言ヲ聽テ之ヲ虐ス其徒苦テ多ク亞墨利加ニ逃ル、ニ及ヒ又諸

港ヲ鎖シテ民ノ外國ニ流移スルコトヲ許サス  
 之ヲ以テ怨ヲ教徒ニ結ヘリ王又官爵ヲ懸ケテ  
 數名ノ議真ヲ馴致レ其中をントウルスヲ擢用  
 シテ之ヲ以テ民怒ニ抗センドセレニ此人官ニ  
 就テヨリ大ニ持論ヲ變レテ頻ニ王權ヲ擴張ス  
 故ニ其黨其富貴ノ為ニ心ヲ變スルヲ憎ミ皆之  
 ヲ視ルコト仇讎ノ如シ其他王ノ百術千計必シ  
 モ皆不善ナルニ非サレトモ既ニ人心ヲ失レテ  
 後ハ王剛毅ヲ以テ事ヲ強フレハ人之ヲ稱シテ  
 暴ト云ヒ又非ヲ知テ過ヲ謝スレハ之ヲ其性ノ

怯ナルニ歸シ一舉一動悉皆民情ニ觸忤レテ千  
 六百三十七年ニ至リ遂ニ土崩瓦解ノ階ヲ開ケ  
 リ○法教改革ノ後ヨリ蘇格蘭ニハ別ニ其國ノ  
 教法アリテ稍英國ト同シカラスゼームス英ニ  
 入テ後全島ノ法教ヲ一ニ歸センコトヲ欲レ千  
 六百十二年ノ頃自蘇格蘭ニ至テ教律ヲ改革セ  
 ンコトアリ此時國人既ニ新法ニ不服ナリシカ  
 王又父ノ意ヲ繼テ屢其國ノ教事ヲ改メシニ王  
 及ロード等ノ説少シク羅馬教ニ傾キ諸儀制舊  
 法ニ疑似スルコト多キヲ以テ北人彌之ヲ悦ハ

ス千六百三十七年王英國ノ制ニ倣テ禮拜ノ式  
 ヲ制レ七月廿三日始メテ之ヲエギンボローノ  
 寺院中ニ讀マレム本日一人ノ僧官盛服ヲ著シ  
 テ其場ニ臨ムニ及ヒ群民忽大哄シテ僧官其書  
 ヲ讀ムコトヲ得ス僧官尚之ヲ壓制セント強ヒ  
 テ壇ニ上リケレハ一人椅子ヲ取テ其頭ニ擲チ  
 タリ僧官大ニ驚キ壇ヲ下テ遁走シケレハ群民  
 追テ其家ニ至リ殆之ヲ毆殺セントス是ヨリ國  
 人大ニエギンボローニ會シテ國教扞護ノ誓書  
 ヲ作り都鄙ノ人民競テ之ニ署押シ全國俄ニ廢

沸ノ如シ王始メテ懼レ急ニ新法ヲ廢棄シタレ  
 トモ其時既ニ晚クシテ國人之ヲ足レリトセス  
 千六百三十八年冬國人密ニ西班牙及佛國ノ兵  
 ヲ借テ國中所々ノ城砦ヲ奪ヒ進テ二國ノ境ニ  
 迫ラントス王乃之ヲ鎮壓セント二万餘人ノ兵  
 ヲ募リ翌年二月悉ク國中ノ貴族ヲ從ヘ盛ニ儀衛  
 ヲ整ヘテベルウキニ到著レタリ是ニ至テ王遠  
 ニ和ヲ議シ兩軍一旦其兵ヲ解キシカ既ニシテ  
 其議又破ル然ルニ王ノ軍資ハ此時既ニ盡キテ  
 復兵ヲ養フコト能ハス或人公會ヲ開カンコト

ヲ王ニ勸メテ曰ク王若氣ヲ降シ意ヲ和ケテ之  
 ニ謀ラハ彼豈ニ必レモ王ニ不良ナランヤト王  
 其議ニ從ヒ千六百四十年四月又議貢ヲ徵聚ス  
 時ニ會議ヲ缺クコト已ニ十一年ナリ本日王躬  
 往テ會ヲ開キ言テ曰ク今次ノ會議予汝カ輩ノ  
 力ニ依テ蘇人ノ反ヲ討センコトヲ欲スト一人  
 傍ニ在テ又其言ヲ贊ス然レトモ衆負之ニ應セ  
 ス又漸ク王ノ不誠ヲ論レケレハ王事ノ諸ハサ  
 ルヲ知リ僅ニ一月ニシテ之ヲ解散ス英軍是ノ  
 如クシテ趨起スル間北人ハ再軍ヲ整ヘテ八月

二十日既ニドゥーヴル河ヲ踰エ同二十七日始メ  
 テ王ノ分隊ト戦テ之ヲ破リタリ是ニ於テ英軍  
 ハ退テヨルクシールヲ保シ蘇人ハ軍ヲユーク  
 スルニ進ム此時王空ントウルスト共ニヨルク  
 ニ在リレカ軍須虧缺シテ敵ノ新銳ニ當ルコト  
 能ハス之ニ加ルニ軍中竊ニ志ヲ北人ニ通スル  
 者多ク國人ノ沸騰モ亦日々ニ盛ナリケレハ王  
 愈々狼狽シテ百計出ス所ヲ知ラス九月二十四日  
 貴族大ニヨルクニ會シテ假ニ北人ト寢兵ノ約  
 ヲ定メ議院ニ憑ルニ非レハ此急難ヲ解クコト

能ハストテ頻ニ公會ヲ促シ、カハ王已ムコト  
 ヲ得ス又諸州ノ議貢ヲ徵シテ倫敦ニ會セシム  
 ○千六百四十年十一月三日此回ノ議貢始メテ  
 會議ヲ開キ是ヨリ千六百六十年ニ至ル迄解散  
 セス世ニ之ヲ名ケテ長公會ト云ヘリ時ニ其前  
 久シク會議ヲ缺キ加フルニ下民ノ憤怒鬱積セ  
 シヲ以テ兩院ノ始テ開クル即叫屈伸冤ノ書紛  
 然湧カ如クニシテ殆應接理治ノ遑アラズ此十  
 年ノ間朝臣最下民ノ為ニ屬目セララル、者四人  
 アリ其二入ハ即トウルストロードニシテ

其他二人ハキンデバンク及フリンチトテ故ト  
 ードノ為ニ薦進セラレシ者ナリ中ニ就テ空ン  
 トウルスハ其前ストラホルドノ侯ニ封セラレ  
 尋テ愛倫ノ都督トナリ常ニ王ノ謀主トシテ其  
 計畫ニ參リ百姓ノ為ニ怨ヲ受クルコト殊ニ深  
 カリケレハ下院第一ニ此人ヲ除カント建議シ  
 其議ノ洩レンコトヲ懼レ院ヲ鎖シテ之ヲ討論  
 ス空ントウルスモ亦自衆怨ノ歸スルヲ知リ深  
 ク會ヲ懼ル、意アリ然レトモ此回ノ公會ハ王  
 殊ニ侯ノ才力ニ依頼シテ其會ニ臨マンコトヲ



欲シ且王尚自信スル所アリ故ニ候ヲ慰シテ曰ク予在リ彼輩ヲシテ汝カ一髮ヲモ害セシメシト候之ヲ辭スバコト能ハス是月九日倫敦ニ来リ同十一日始メテ上院ニ至リシニ下院方ニ候ノ罪案ヲ議シ終リテ之ヲ上院ニ輸シ、時ナリケレハ直ニ候ヲ執ヘテ獄ニ投シタリ斯テ下院ノ氣勢一時ニ暴發シテ收束ス可カラス後數日ニシテ奔ンデバンク及フリンチハ禍ヲ懼レテ共ニ他邦ニ奔竄シ十二月十八日ロイド亦執ハラレテ獄ニ下サル王一朝ニ四人ノ股肱ヲ失ヒ

朝廷ノ百官皆股票シテ一語ヲモ出スコト能ハス王亦勢ノ敵ス可カラサルヲ知り手ヲ拱シテ敢ヘテ争ハス會議起テ僅ニ數週ヲ出テサルニ國權暗ニ下院ノ手ニ歸シタリ○是ニ於テ下院不法ノ稅ヲ除キ無辜ノ囚ヲ釋シ諸專斷ノ法衙ヲ撤シ又仰行ノ自由ヲ復シ凡法衙ノ官吏租稅ノ徵使或ハ市邑ノ尹令ノ類其前十年ノ間王意ニ阿テ暴威ヲ逞クセシ者皆兇徒ノ名ニ坐シ不時ニ撥摘セララル、カ故ニ人々危懼ノ心ヲ抱テ屏息スルニ至レリ且此時下院ノ人負獨百姓ノ

黨ノミニ非スハイド及ハルクランド等ノ如キ  
 ハ皆沉實ニシテ過激ヲ好マス深ク心ヲ王家ニ  
 存スト雖弊害ヲ鋤クノ一事ニ於テハ其議常ニ  
 相協和シテ一人ノ異ヲ立ツル者ナシ又此田ノ  
 集議ハ北方ノ擾亂ヨリ起リシニ因テ始メテ王  
 ノ傲頑ヲ挫キシハ北軍ノ力ニ依レリトテ下院  
 密ニ北軍ト相維持シテ故ニ之ヲ解カス又往時  
 エドワルド第三世ノ朝ニ一年一次必議負ヲ徵  
 ス可シトノ律定マリシカ後世嚴ニ之ヲ守ラス  
 是ニ至テ議院一事ヲ定メテ云議負徵聚ノ期ハ

必三年ヲ超ユ可カラス每三年九月三日朝廷必  
 徵負ノ檄ヲ發スヘシ又官若其激ヲ發セスハ諸  
 州ノ人民自會シテ議負ヲ撰貢スヘシト又云フ  
 會議五十日ニ滿タサレハ議院ニ謀ラスシテ之  
 ヲ閉鎖シ或ハ解散ス可カラスト又 ピリタシ タシノ  
 教派ハ質朴潔素ヲ旨トシテ舊教華奢ノ風ト氷  
 炭相容レス然ルニ此頃下院ノ人負十ノ六七ハ  
 皆此派ノ人ナリケレハ近頃國教ノ彌昔時ニ復  
 セントスルヲ惡ミ寺院ノ彫飾或ハ木像ノ類ノ  
 如キ皆焚毀シテ一物ヲ遺サス又僧官ハ宜シク

國事ニ與カルヘカラストテ悉之ヲ上院中ヨリ  
 逐ハント謀リシカ上院ノ之ニ與セサルヲ以テ  
 其事僅ニ息ミタリ蓋議院ノ分争起リシヨリ是  
 ニ至ル迄上院ハ只依違スルノミナリシカ此頃  
 下院ノ為ル所稍激暴ニ涉ルヲ見テ始メテ憤發  
 抗争スル者アリ○千六百四十一年三月二十八  
 日兩院各數員ヲ擇テ始メテ空ントウルスノ糾  
 彈ヲ開キ下院其罪二十八條ヲ舉ケテ云フ空ン  
 トウルス王ヲ佐ケテ國家ノ舊法ヲ覆レ獨裁擅  
 制ノ政府ヲ建テ之ニ代ヘント謀レリト下院

又反逆ノ罪ヲ以テ候ヲ處セント謀リシカ英國  
 ノ舊制直ニ王身ヲ犯ス者ニ非レハ反逆ノ例ニ  
 入ル、コトヲ得ス下院乃牽強ノ説ヲ作テ曰ク  
 專斷ノ制ハ王ノ身ニ害アリ苟モ王ヲ誘シテ危  
 害ニ陷ラレムル者ハ反逆ヲ以テ之ヲ論シテ可  
 ナリト空ントウルス口ヲ極メテ之ヲ辨駁シ十  
 七日ニシテ屈セス其議論爽快痛切ニシテ審聽  
 ノ官ト雖皆情ヲ動カサ、ルハナシ王亦頻ニ之  
 ヲ憐ミ竊ニ其逃逸ヲ謀リシカ獄吏ノ為ニ阻セ  
 ラレテ其計遂ケス又北征ノ軍ヲ呼ヒ迫テ公會

ヲ解カントセシニ下院早ク之ヲ覺察シ愈相結  
 托セシカハ王懼レテ敢テ發セズ亂彈ノ初ニ當  
 テ上院ノ人負八十名アリ然レトモ皆下院ノ勢  
 ヲ怖レテ漸クニ逃ヒシ其斷ヲ定ムルニ至テ之  
 ニ臨ム者僅ニ四十五人其内侯ヲ誅スヘント曰  
 フ者二十六人其過當ヲ論スル者十九人ニレテ  
 其獄遂ニ成リ五月八日兩院狀ヲ上テ王ノ施行  
 ヲ請フ時ニ朝臣悉ク逡巡シテ敢ヘテ侯ノ為ニ言  
 フ者アラス獨、倫敦ノ教長ジークダント云フ者  
 奮テ曰ク王若此獄ヲ寬トセハ何ソ意ヲ枉ケテ

人ニ從ハント王ヲ激勵セシカ王ノ氣力既ニ沮  
 喪シテ其言ヲ用キルコト能ハス遲疑憂悶スル  
 コト二日ニレテ終ニ准死ノ命ヲ下シケレハ此  
 月十二日官吏侯ヲトールヨリ出シテ之ヲ背  
 後ノ阜上ニ斬殺ス侯常ニロードトカラ戮セテ  
 百姓ノ黨ニ抗シ其行ヲ所國ニ害アリシハ固ヨ  
 リ昭々ニシテ下院ノ控訴スル條件大抵ハ實證  
 アリト雖其刑ノ過重ナルハ亦疑ヲ容レズ且其  
 辨論ノ間毫モ撓屈セザリシニ因テ其罪ヲ忘レ  
 テ之ヲ惜ム者多シ○八月初旬王又蘇格蘭ニ至

テ教會中ノ首領ト面議シ遂ニ悉其持論ヲ抛テ  
 蘇國ノ國教ヲ回復ス此行下院其勢ヲ北方ニ夸  
 耀シ併セテ王權ノ衰替ヲ視サント其貞中ノ者  
 ヲ選テ王ニ隨行セシメ蘇人ト約シテ尚一年ノ  
 間其兵ヲ駐留セシメ又三十万ポントノ餽贈ヲ  
 為シテ去冬以來援助ノ勞ヲ謝シテ毫モ憚ル色  
 ナレ○九月八日議院暫ク會ヲ撤シ其間兩院各  
 數人ヲ留メテ假ニ事務ヲ攝セシム蓋議院其閉  
 院ノ間人ヲ留メテ事ヲ行ハシムルハ上古ヨリ  
 其例ナキ所ナリト云フ○愛倫ニハ其國ノ護衛

トシテ平常三千ノ兵ヲ置ケリ左ントウルスノ  
 此國ニ都督タリシ頃陰ニ之ヲ以テ議院ノ勢ヲ  
 壓セントシ其數ヲ一万二千ニ増加シケルカ議  
 院其意ヲ覺リ強ヒテ之ヲ舊數ニ復セシム然ル  
 ニ此時放遣セラレタル兵士豪族ロシル、モール  
 及土酋ヘム、オニール等ヲ推シテ是歲ノ冬亂ヲ  
 起シ、カ此國ハ僻遠ニ在ルヲ以テ土著ノ英人  
 尚純然タル舊教ヲ固執セル者多ク其徒悉賊徒  
 ニ加リ前後群起シテ全島忽蜂窠ヲ撥スルカ如  
 シ時ニ英民ノ移住セル土地分レテ數州トナリ

中ニ就テ尤<sup>モ</sup>繁華ノ地ト稱スル一州ユルストル  
 ニ賊徒等第一ニ亂入シテ貴賤男女ヲ擇ハス手  
 ニ隨テ殺戮シ是ヨリ他ノ諸州ニ散蔓シテ家屋  
 ヲ毀壞シ田野ヲ蹂躪シ又居民ノ衣服ヲ剝テ之  
 ヲ逐フ會嚴冬冰雪ノ候ニ遇テ老幼郊野ニ露立  
 シ凍<sup>互</sup>ニ堪ヘス命ヲ殞ス者前後相望メリ此間  
 死<sup>凶</sup>十<sup>万</sup>ヲ以テ數フト云フ然ルニ十月廿日議  
 負再會ヲ開クニ至リ愛倫ノ變報至テ曰フ土賊  
 皆王ノ命ヲ愛クト稱シ勅書ヲ持スル者アリト  
 是ニ於テ負中往々其說ヲ信シ議負ノ憤怒亦一

層ヲ増シタリ王蘇格蘭ニ在テ變ヲ聞キ十一月  
 五日倫敦ニ歸リケルニ議負囂々トシテ王ヲ責  
 メテ已マス王群疑ヲ解カント悉<sup>ク</sup>愛倫ノ軍事ヲ  
 以テ議院ニ托シケレハ衆負却テ討賊ヲ名トシ  
 テ大ニ糧食武器ヲ辨備シ又王ノ舊惡二百六條  
 ヲ數ヘテ之ヲ民間ニ鏤行シ議院ノ王ニ信據セ  
 サル所以ヲ論述シタリ斯テ下院ノ凌轢朝暮ニ  
 盛ナリケレハ上院中ノ諸負漸ク王ニ黨スル者  
 アリ又ハイド及ハルクランド等ノ諸人未<sup>タ</sup>下院  
 ヲ去ラスト雖既ニ志ヲ王ニ通シテ屢<sup>レ</sup>院中ニ抗

中ニ就テ尤<sup>モ</sup>繁華ノ地ト稱スル一州ユルストル  
 = 賊徒等第一ニ亂入シテ貴賤男女ヲ擇ハス手  
 = 隨テ殺戮シ是ヨリ他ノ諸州ニ散蔓シテ家屋  
 ヲ毀壞シ田野ヲ蹂躪シ又居民ノ衣服ヲ剝テ之  
 ヲ逐フ會嚴冬冰雪ノ候ニ遇テ老幼郊野ニ露立  
 シ凍互ニ堪ヘス命ヲ殞ス者前後相望メリ此間  
 死凶十<sup>二</sup>万ヲ以テ數フト云フ然ルニ十月廿日議  
 負再會ヲ開クニ至リ愛倫ノ變報至テ曰フ土賊  
 皆王ノ命ヲ愛クト稱シ勅書ヲ持スル者アリト  
 是ニ於テ負中往々其說ヲ信シ議負ノ憤怒亦一

層ヲ増シタリ王蘇格蘭ニ在テ變ヲ聞キ十一月  
 五日倫敦ニ歸リケルニ議負器々トシテ王ヲ責  
 メテ已マス王群疑ヲ解カント悉愛倫ノ軍事ヲ  
 以テ議院ニ托シケレハ衆負却テ討賊ヲ名トシ  
 テ大ニ糧食武器ヲ辨備シ又王ノ舊惡二百六條  
 ヲ數ヘテ之ヲ民間ニ鏤行シ議院ノ王ニ信據セ  
 サル所以ヲ論述シタリ斯テ下院ノ凌轢朝暮ニ  
 盛ナリケレハ上院中ノ諸負漸ク王ニ黨スル者  
 アリ又ハイド及ハルクランド等ノ諸人未ダ下院  
 ヲ去ラスト雖既ニ志ヲ王ニ通シテ屢院中ニ抗

論シ又朝廷ノ官負及諸方有志ノ少年王ノ緩急ニ赴カント相聚テ團ヲ為シ是歳ノ末ニ至テハ屢都下ノ小民ト衝擣シテ或ハ血ヲ灑クニ至レリ○王蘇格蘭ヨリ歸テ後一策ヲ獻スル者アリテ云ク下院ノ勢強シト雖其事ヲ主宰スル者ハ數人ニ過キス若此輩ヲ執ヘテ院中ヨリ除カハ他ハ誠ニ與シ易カラント王之ニ從ヒ千六百四十二年一月人ヲ上院ニ遣リ言ハシメテ曰クキ  
ンボルトンホルリスハンブデンパイム等ノ六人反逆ノ罪アリ執ヘテ之ヲ治セスハ有ル可カ

ラスト此中キンボルトンハ獨上院ノ負ニシテ他ノ五人ハ皆下院ノ者ナリ翌四日王二百ノ衛士ヲ從ヘテ親下院ニ至リ衛士ヲ戶外ニ止メテ獨院中ニ入り五人ノ者ヲ覓メシカ皆既ニ遁匿シテ席ニ在ラス王之ヲ衆中ニ問ヘトモ衆負敢ヘテ答フル者ナシ王又議長ヲ責メケレハ議長對ヘテ曰ク臣今見ル可キノ目ナク言フ可キノ舌ナシ臣ノ職ハ只此院ノ衆論ニ從フ可キノミト此夜六人潛ニ院中ヲ逃レテ其身ヲ市人ニ托セシカハ市人屯聚シテ徹宵篝火ヲ燃シ兵ヲ執



テ之ヲ環衛セリ翌五日王倫敦ノ會議所ニ至リ  
又彼六人ヲ乞ヒシカ終ニ之ヲ得ルコト能ハス  
而シテ此往復ノ間市人ハ街上ニ群呼シテ頻ニ  
王ヲ罵リ或ハ譏語ヲ作テ王ノ車中ニ投スル者  
アリ既ニシテ事勢愈逼リ王倫敦ニ在ルコトヲ  
得ス是月十日王僅ニ宮人ヲ從ヘテハンプトン  
ノ離宮ニ退キケレハ同十一日市人戦船騎卒ヲ  
發シテ水陸ヲ護衛シテームス河中ニ走舸ヲ浮  
ヘテ六人ヲ院中ニ送還シタリ○是ニ於テ議院  
愈糧餉ヲ儲ヘ兵士ヲ募リ又密ニポルツマウス

及ヒールノ邑宰ニ令ヲ傳ヘテ各堡壘ヲ修繕シ  
警備ヲ嚴ニシテ進退皆議院ノ命ヲ待タシム是  
ヨリ前州牧邑宰ノ類大抵皆議院ノ為ニ其官職  
ヲ褫レシカ是ニ至テ議院之ヲ其舊ニ復セント  
議ス其實ハ議院ニ服事スル者ノミヲ命シテ全  
國ノ兵權ヲ握ラント謀ルナリ二月初旬此案兩  
院ノ決ヲ經テ之ヲ王ニ上テ其允許ヲ請ヒ且王  
遠方ニ在テハ事ヲ議スルニ便ナラス一テ倫敦  
ニ歸住センコトヲ請フ然レトモ王兩ナカラ之  
ヲ聽カス議院乃チ王ヲ脅シテ曰ク王若レ此請ヲ許

サスハ議院衆論ノ為ニ迫ラレテ已ムコトヲ得  
 ス兵馬ノ權ヲ強奪ス可シト時ニ后ヘンリータ  
 密ニ王ノタメニ彈藥武器ヲ調セントテ和蘭ニ  
 オモムキ王コレヲ送テトールブルニ在リツヒニ  
 議院ノタメニ要迫セラレンコトヲ恐レ其二子  
 查理ルス及ゼームスヲシタカヘテ是ヨリ又ヨ  
 ルクニ退ク○三月十九日王ヨルクニ到着シ其  
 後ヒールノ邑ヲ得テ之ニ據ラントシ四月二十  
 三日ミツカラ其郭外ニ至リシカ邑宰ホザム議  
 院ノ約束ヲ守テ城門ヲ開カス然レトモヨルク

ノ市民ハ皆王ノ至ルヲ悦ヒ多ク郷勇ヲ募テ親  
 兵ニ備ヘ又諸州ノ貴族或ハ自ヨルクニ至リ或  
 ハ使者ヲ送リ争テ勤王ノ意ヲ陳ス是ニ於テ王  
 ノ意稍強クシテ遂ニ兵ヲ起サント決ス然レト  
 モ又軍資ヲ辨スル所ナク僅ニ林苑ヲ民ニ質シ  
 又貴族ノ金ヲ假借シ后又和蘭ニ在テ其冠飾ヲ  
 典シ僅ニ軍須ヲ購得シテ之ヲ王ニ餽リケレハ  
 王此等ヲ以テ若干ノ兵ヲ募リ八月二十二日陰  
 霾風雨ノ夕始メテ王旗ヲツチンハムノクッスル  
 山ニ樹ツ倫敦ニ於テハ議院王ノ為ニ請書ヲ卻

ケラレテヨリ一種奇異ノ説ヲ作り王位ト王身トハ素<sub>ト</sub>自<sub>ラ</sub>別ナリトテ恣ニ王ノ名ヲ用キテ愈軍需ヲ微發セシカヨル<sub>ク</sub>ノ土民悉<sub>ク</sub>王ニ與シテ兵ヲ募ルト聞キ始メテ準備ヲ公ニセリ斯ノ如クニシテ二黨日ニ干戈ヲ尋キシカハ國人又各歸嚮スル所ヲ定メ農工商賈ヲ首トシテピリタシ教徒及蘇格蘭國教ニ從フ者ノ類其榮悴ヲ議院ノ汚隆ニ仰望スル者ハ悉<sub>ク</sub>議院ニ與シ貴族高僧及ヒ英ノ國教ヲ奉スル者等凡<sub>ク</sub>王ト浮沉ヲ共ニスル者ハ舉テ王ニ加レリ其他草野ノ豪傑功名

ヲ顯ハシ富貴ヲ博セントスル輩踴躍シテ王ノ募ニ應シハイドハルクランド及コールペペル等其議論ノ合ハサルヲ以テ亦意ヲ決シテ王ニ歸ス○九月九日兩黨各榜示ヲ出シテ戦ヲ起ス所以ヲ告諭シ同日エセックスノ侯ロベルトノルサンプトンニ發向シテ議院ノ兵ヲ領ス時ニ王ノ戦備未<sub>ダ</sub>整ハス兵衆寡弱ナルヲ以テ王一旦シリュースボリニ退キシカ須臾ニシテ一万餘人ヲ得ケレハリンドセイノ侯ヲ其總督トシシヤルトアストン等ヲ之ニ副ヘテ再都門ニ向ハシ

ムリペルトハラインノ部長ブレデックノ子ナ  
 リ英國ノ難起ルト聞テ其弟マウライスト共ニ英  
 ニ来リ后王ヲ援カテ屢功アリ斯テ十月二十三  
 日王軍ワルウキ州中ノエッ金山ニ至テ始メテ大  
 ニエセックスノ兵ト戦フ是日兵ノ交リシ頃既ニ  
 晡時ニ近ク日没ニ至テ戦未決セス兩軍共ニ兵  
 ヲ執テ且ヲ待ナシカ翌日黎明再陣ヲ對スルニ  
 至リエセックス急ニ兵ヲ引テワルウキニ退キケ  
 レハ王亦其軍ヲ収メテ舊營ニ歸レリ此役王ノ  
 大將リンドセー傷ヲ被リ後數日ニシテ死ス是

ヨリ是歲ノ冬王リーディングノ邑ヲ奪ヒ進テ倫  
 敦ニ迫リシカ大ニ為ルコトナシ翌年四月ニ至  
 テ數月攻圍ノ後リーディングモ亦エセックスノ為  
 ニ奪還セラレケレハ王又退テオキスホルドニ  
 入り其後亂未ニ至ルマテ大概此地ヲ以テ其本  
 營トス○此間ニューグスルノ侯王ノ軍ニ將トシ  
 テノルサンベランド等ノ數州ヲ下シヨルクヲ  
 奪ヒ軍勢張ルコト甚シク尋テ西方モ亦大ニ風  
 靡シタリ是ヨリ先キ千六百四十三年春西南諸  
 州ハ大抵議院ノ兵ニ據有セラレテ王ノ為ニ守

ル者ハ僅ニコルンワルノ一州ニ過キス是夏王  
 ハルトホルドノ侯及マウライスニ一隊ノ騎兵  
 フ附シテコルンワルニ遣リケルカ此軍西方ニ  
 至テ後直ニデボンノ全州ヲ蹂躪シ七月五日バ  
 スノ近傍ロンスダウント云フ地ニテ議院ノ兵  
 ト戦ヒ同十三日再デビーゼスノ近傍ニ戦テ遂  
 ニ之ヲ破リ其將率ルム、ワルレル逃レテブリ  
 ストルニ入リシカ其後十餘日ニシテ王軍又此  
 邑ヲ降シ遂ニ王ノ麾下ト合レテ八月十日轉シ  
 テグローストルヲ圍ミタリ○是ヨリ先、王屢使

者ヲ遣テ議院ト和ヲ講スレトモ其議皆果サス  
 議院ノ要求スル所理外ノ事多キカ故ニ院中ノ  
 人ト雖往々憤怒ヲ挾ム者アリ是歳首夏エドモ  
 ンド、ワルレル等黨ヲ結ヒ密ニ議院ヲ要シテ和  
 フ講セント謀リシカ事洩レテ首謀皆斬戮セラ  
 ル然レトモ其後議論常ニ一ヲヲス西州ノ敗報  
 頻ニ倫敦ニ至リシ頃ハ院中ノ不和殊ニ盛ニシ  
 テ事々統一スルコト能ハス人皆和ヲ請テ危急  
 フ避ケンコトヲ欲セシカビリタンノ激徒等百  
 方之ヲ沮ミ遂ニ又エダクスニ一万四千ノ兵ヲ

附シテグローストルヲ救シム○王グローストルヲ圍メトモ守將能ク禦テ抜クコト能ハス既ニシテエダクス大衆ヲ率キテ来リ援フト聞キ終ニ圍ヲ撤シテ銳ヲ避ケ其歸路ニ要レテ戦ハントスエダクスノ軍モ亦騎兵ニ乏シクシテ戦ヲ好マス圍ノ解クルヲ幸トシ直ニ倫敦ニ向テ歸リケルカ其途中ニイボリーニ至ル比王既ニ兵ヲ聚メテ此處ニ在リエダクス不意ニ出テ、避クルコトヲ得ス九月二十日又戦ヲ交フ是日モ亦勝敗未ダ判マズシテ日暮ニ及ヒケレハ兩軍

交、退キ翌朝エダクスハ直ニ其軍ヲ進メテ倫敦ニ歸リタリ此役ハルクランド戦死スハルクランドハ兵起テヨリ常ニ鬱悒樂マス是日朝人ニ語テ曰ク國家ノ亂離ハ尚茲ニ止ラス然レトモ余ハ既ニ世ニ倦ミタリ今日ヲ出テスシテ身ヲ事外ニ置クヘシト云ヒシカ果シテ戰場ヲ退カスレテ死ス○是歲夏ヨリ冬ノ間北部ノ戦争勝敗一ナラス千六百四十四年一月愛倫鎮撫ノ兵隊王ノ命ヲ奉シテ入援シ威爾斯ノ北部ニ上陸シテ進テ左レトルヲ降シタリシカ二十五日ナ

ント奪ツチニ於テ不意ニ議院ノ大将ハイルハック  
 スニ掩撃セラレ又大ニ敗走ス○愛倫ノ兵隊入  
 援ノ議ト前後シテ議院亦蘇格蘭ト盟ヲ結ヒ北  
 將レベン是年一月ヲ期シテ二万ノ兵ヲ率キ南  
 下セントノ約アリ王軍北部ノ總督ミークスル  
 之ヲ聞キ其部下ヲ督シテ自ラ之ニ備ヘケルカハ  
 イルハックス既ニナシト奪ツチノ敵ヲ卻ケ其勝兵  
 ヲ以テ後ニ迫リケレハミューグスル腹背敵ヲ受  
 ケテ遂ニヨルクニ退キハイルハックスレベン隨  
 テ之ヲ合圍シ後數月マンチェストルノ侯某リン

コルンヲ降シテ又來テ攻兵ニ加リケレハ城中  
 愈々窮シテ其陷沒既ニ旦夕ニ在リ然ルニ適シ  
 パルト二万ノ援兵ヲ以テヨルクニ近ツキケレ  
 ハ攻兵圍ヲ解テマルストン、ムールニ退キタリ  
 且ペルトハ勇ナリト雖粗暴ニシテ謀ヲ好マス  
 攻兵マルストンニ退テ後書ヲ城中ニ贈リ戦ヲ  
 挑ミケレハリュペルト怒テ戦ハントルミューグス  
 ル之ヲ諫ムレトモ聽カス我王ヨリ命ヲ受ケタ  
 リトテ七月二日遂ニ城外ニ出テ、敵ト相對ス  
 議院ノ裨將ニオリブル、ヨロン、空ルト云フ者ア

リ大志アリテ最用兵ノ術ニ長シ常ニ其部下ヲ  
 精練シテ向フ所勝タサルコトナシ因テ其兵ヲ  
 鐵身兒ト稱ス是日コロンクル左軍ノ將トナリ  
 テリュベルトノ隊ト相對シケルカ兩軍纔ニ交レ  
 ハコロンクル直ニ進テ之ヲ擣破シ北クルヲ逐  
 テ戰場外ニ長驅ス又王軍ノ左ハリュカスト云フ  
 將大ニ敵軍ヲ襲テ奮戦スルコト數刻悉之ヲ四  
 方ニ驅逐シテ謂ヘラク敵既ニ逃レ去レリト其  
 輜重ヲ奪テ既ニ退キ去ラントスル時コロンクル  
 ルモ亦既ニ大捷ヲ得タリト信シ戰場ニ歸リ來

テ不意ニ之ト搪突シタリ二人相見テ大ニ驚口  
 キ彼我互ニ地ヲ代ヘテ再大ニ戦ヒシカ稍久シ  
 クシテ王軍終ニ全ク敗レ其大砲悉敵ノ為ニ奪  
 取セララル戦争ノ翌日ニリュカスルハ其言ノ用キ  
 ラレスシテ敗辱ヲ得タルヲ怒リ且恢復ノ期ナ  
 キニ倦テ直ニ大將ノ職ヲ辭シスカルボロイヨ  
 リ船ヲ雇テ海外ニ逃ル其後リュベルトモ亦敗兵  
 ヲ聚メテランカレールニ退キケレハヨルク及  
 ニリュカスルノ二城相踵テ敵ニ降リ十月ノ末ニ  
 至テ北方悉議院ノ手ニ歸レタリ○然レトモ西



南及中州ノ地ニテハ是歳ノ間王躬將トシテ屢  
 議院ノ兵ヲ挫キ其勢大ニ北地ト同シカラス四  
 月エチクス及ワルルル期ヲ約シテ共ニオキス  
 ホルドニ迫リケレハ王一旦之ヲ避ケテウリス  
 トルニ退キシカ既ニシテエチクス又其兵ヲ引  
 テ西州ニ赴クト聞キ急ニ返テ六月二十九日ワ  
 ルルルノ軍ヲバンボリノ近傍ニ破リ直ニエ  
 チクスヲ逐テ西發ス時ニエチクスハエルンワ  
 ルニ在テ土兵ノ為ニ圍マレシカ王又大兵ヲ率  
 キテ至ルニ及ヒ遂ニ軍ヲ棄テ、單身プライマ

ウスニ逃レケレハ歩卒ハ悉ク王ニ降り其彈藥輜  
 重亦皆王ニ奪ハル是ヨリ先ワルルノ敗レシ  
 後其部下ノ兵皆膽ヲ落シテ次第ニ逃散レエチ  
 クス其軍ヲ失フニ及テ西南全ク議院ノ兵ナレ  
 然レトモ議院又急ニ新兵ヲ募テ發遣シ十月二  
 十七日王之トニリボリニ戦テ其兵少シク敗  
 レケレハ王又オキスホルドニ退キ時候既ニ寒  
 ニ向フヲ以テ明年ヲ待テ戦ヲ復セント期ス○  
 ロードノ獄ニ下リシ後軍事控惚ニシテ議院之  
 ヲ糾問スルニ違アラハ是年ノ冬戦争少シク餘

暇アリケンハ議院之ヲ獄ヨリ出シテ其罪ヲ論  
 シ下院必之ヲ殺サント期セシカロイドノ為ニ  
 論證スル者多クシテ其口實ヲ得ルコト能ハス  
 是ニ於テ下院其獄ヲ終ヘスシテ枉ケテ誅殺ノ  
 令ヲ作り之ヲ上院ニ輸シ、ニ上院亦之ニ抗論  
 セレカハ下院更ニ都下ノ小民ヲ喚シテ上院ニ  
 迫リ翌年一月十日遂ニ其首ヲ刎ヌ○是時ニ當  
 テ英國教派ノ中其大ナル者三アリ其一ヲ英ノ  
 國教トシ一ヲ蘇格蘭ノ國教トシ又其一ヲピュリ  
 タントス此三者各異ヲ立テ、相下ラス戦争ノ

起テヨリ後ハ二黨ノ主トシテ論スル所皆此三  
 教ノ事ニシテ王ノ死ニ至ル迄和ヲ議セシコト  
 前後殆トヲ以テ數フト雖皆之カ為ニ完成スル  
 コト能ハス然ルニ千六百四十四年ノ開議院ノ  
 中ニ又自主黨ト名クル一種ノ教派起テピュリタ  
 シ教ト密ニ相凌轢シタルカ是歲ノ冬ニ至テ二  
 教ノ睥睨愈甚シク遂ニ各黨ヲ結テ院中ノ議論  
 又二分シタリ此黨ノ教士ハ皆上下平均ノ説ヲ  
 標準トシテ國事ハ必民政ヲ期シ又教法中ニ僧  
 官アルコトヲ許サスコロシタル及ヘンリ、バ

ン等ヲ此黨ノ巨魁トシテ其他俊秀ノ士多ク之  
 ニ加ハリケレトモ其勢力ビリタニノ徒ニ比ス  
 レハ尚微弱ニシテ議論ヲ以テ勝ツコト能ハス  
 故ニ常ニ狡黠欺罔ヲ以テ之ニ敵セリ斯テ是歲  
 十二月コロン空ル又議院中ニ建議シテ凡<sup>レ</sup>院中  
 ノ負タル者ハ文武共ニ官ヲ帶フヘカラストテ  
 悉<sup>ク</sup>エセツクス及<sup>リ</sup>タルレ以下ノ諸將ヲ罷メテ更  
 ニハイルハツクスニ軍務ヲ委ネ又其身ハ院中ノ  
 一員ニシテ官ヲ帶ヒサル例中ニ在リト雖陰ニ  
 ハイルハツクスヲ賺シテ其副將ニ補セララル然ル

ニ元來ハイルハツクスハ懇直ニシテ權詐ニ疎ク  
 毎事コロン空ルノ為ニ賣弄セラレ是ヨリ兵權  
 暗ニコロン空ルノ手ニ歸シテ自主黨大ニ氣勢  
 ヲ得タリ○此頃ニ黨又和議ヲ開キ頻ニ往復辯  
 論シケルカ千六百四十五年二月ニ至テ此議又  
 破レ五月王再オキスホルドヲ發シ自<sup>ラ</sup>將トシテ  
 空<sup>ク</sup>ストルノ圍ヲ救ヒ其歸路レ<sup>レ</sup>ストルヲ襲テ  
 又之ヲ奪フ適ハイルハツクス虚ヲ窺テオキスホ  
 ルドヲ圍ムト聞キ急ニ其軍ヲ旋ラシテ其救ニ  
 赴キレカハイルハツクスハ亦王ノ連勝ヲ聞キ圍

ヲ撤シテ北向シ六月十五日ノルサンプトン州  
 中ナセベローニ至テ兩軍不慮ニ出逢ヒタリ王不  
 意ニ敵衆ノ為ニ歴セラル、ヲ見テ餘衆ノ聚ル  
 ヲ待テ戦ハントセシカリユペルト又其議ニ與ヒ  
 ス遂ニ兵ヲ交フ是日王中軍ニ將トシテリュペル  
 ト其右ヲ令シ戦起ルニ及テリュペルト敵ノ一隊  
 ヲ破リ其將ヲ虜ニシテ更ニ敗兵ヲ追撃ス王モ  
 亦ハイールハックスト戦テ幾其隊ヲ破ラントシケ  
 ルカ折シモコロシタル王ノ左軍ヲ破リ返テハ  
 イルハックスニカヲ戮セケレハ王ニ方ニ敵ヲ受

ケテ支フルコト能ハス終ニ大ニ敗走ス既ニシ  
 テリュペルト再戰場ニ歸リレニ麾下既ニ崩潰シ  
 テ復整理スヘカラス王悉其銃砲彈藥ヲ野ニ委  
 棄シ僅ニ騎兵ヲ從ヘテ威爾斯ニ退キケレハリュ  
 ペルトモ亦プリュストルニ遁走セリ○ナセベロー  
 ノ戦ノ後ハ諸州ノ王軍漸ク振ハスハイールハック  
 ス勝兵ヲ率キテブリージュワートルバス及セル  
 ボルン等ノ諸邑ヲ連下シ九月ブリュストルノ邑  
 ニ近ツキケレハ是月十日リュペルト堡砦ヲ棄テ  
 テ遁走ス時ニ王プリュストルノ危急ヲ聞キ自之

ヲ援ケント既ニ行ヲ治セシカリムペルト戦ハス  
 シテ走ルト聞キ怒ルコト甚レク悉其官爵ヲ褫  
 テ之ヲ海外ニ放逐ス○時ニ在ストル再圍ヲ受  
 クルニ會ヒ王自之ヲ救テ是月二十三日却テ大  
 ニ破ラル王乃チ敗兵ヲ聚メテオキスホルドニ退  
 キケルカ是年冬ノ間ハイルハックスコロシタル  
 ト共ニ悉西南及中州ヲ平定シ千六百四十六年  
 ノ春ニ至テハオキスホルドヲ除ク外ハ全ク王  
 ノ為ニ守ル者ナシ○王其勢ノ日ニ感マルヲ見  
 テ屢使者ヲ議院ニ遣リ辭ヲ卑レクシテ和ヲ求

ムト雖議院只往事ヲ歷詆シテ隻辭ノ答書ヲモ  
 報セズ王又関券ヲ得テ自倫敦ニ入リ面リ事ヲ  
 議セント請ケレハ却テ令ヲ諸方ニ下シテ愈警  
 備ヲ嚴ニセリ是ニ於テ王愛倫ノ叛徒ト和ヲ結  
 ヒ其舊教ヲ英ニ興サント約シテ一万ノ兵ヲ借  
 ラントセシニ其約書不幸ニシテ議院黨ノ手ニ  
 落チケレハ又議院ノ為ニ一ノ口實ヲ増シタリ  
 此際ニ當テハイルハックス兵ヲ率キテオキスホ  
 ルドニ迫リ日ヲ刻シテ邑ヲ圍マントシケレハ  
 王大勢ノ既ニ挽回ス可カラサルヲ知リ千六百

改正

卷六

四

一

了

四十六年四月二十六日夜僅ニ二人ヲ從ヘテオ  
 キスホルドヲ逃レ五月五日ミリアルクノ邑外  
 ニ至テ身ヲ蘇格蘭ノ軍ニ投ス此時北人自主黨  
 ノ日ニ氣勢ヲ逞シクスルヲ見テ大ニ憚ハス之  
 ニ加フルニ王ハ素其國ノ産ニシテ且歷世君主  
 ノ統ナルカ故ニ王令生死ヲ以テ彼ニ托セハ彼  
 必憐テ或ハ憤發スルコトアラント計リシナリ  
 然ルニ北軍ハ王ノ不意ニ至ルヲ見テ大ニ驚キ  
 敬禮ヲ盡シテ厚ク之ヲ待チシカ其實ハ王ヲ援  
 クルニ意アラス時ニ近來數年間ノ戰費尚議院

ヨリ北軍ニ償フ可キ者アリ故ニ北軍王ヲ以テ  
 奇貨トシ擁シテ遺金ヲ得ンコトヲ欲ス是ヨリ  
 論談八月ニシテ千六百四十七年一月三十日北  
 人遂ニ四十万ポンドヲ以テ王ヲ議院ニ賣與ス  
 ○此時ビリタ<sup>ン</sup>徒ノ強ハ議院ニ在リ自主黨ノ  
 強ハ陸軍ニ在リ議院王ヲ得テ後兵革ノ事一時  
 止ミケレハ自主黨ノ勢ヲ挫カンカタノ國用ヲ  
 省クニ託シテ兵士ノ一分ヲ遣歸セントス然ル  
 ニ偏裨ノ諸將多クハ草莽ヨリ崛起セシ者ニシ  
 テ今又鄙賤ニ歸ルヲ惡ミ且士卒モ亦未其俸ヲ

得サルヲ怒テ共ニ此事アルヲ擇ハスコロン  
 ルハ人ト為リ狡獪多智其意群雄ヲ排シテ自ラ大  
 權ヲ握ランコトヲ欲シ軍士ノ不平ヲ懷クニ乘  
 シテ陰ニ之ヲ煽揚ス議院コロンの空ルニ命シテ  
 諸將ト共ニ軍士ヲ綏撫セシムルニ及ヒコロンの  
 空ル敢ヘテ勸解ノ策ヲ施サス數日ノ後反命シ  
 テ曰ク軍士ノ訴フル處皆確著ニシテ據ル所ア  
 リ議院強ヒテ之ヲ制セントスルハ甚理ニ非ス  
 ト時ニ王ハノルサンプトン州中ホルムバイニ  
 在リ五月四日コロンの空ル竊ニ其部將ジョイスト

云フ者ニ命シ王ヲ奪テ之ヲ軍中ニ奉入スハイ  
 ルハックスハ尚上將ノ位ヲ擁スト雖諸將ノ為ニ  
 輕侮セラレテ此議ヲ関リ知ラス議院怒テコロ  
 ンの空ルヲ執ヘントシケレハコロンの空ル之ヲ謀  
 知シテ軍中ニ逃レ六月十日却テ其營ヲセント  
 アルバンスニ移シ倫敦ニ迫ラントス是ニ於テ  
 議院市兵ヲ驅テ郭門ヲ警護シ都下又騒然タリ  
 然レトモ其後議院北教ノ首領十一人ヲ院中ヨ  
 リ放逐シ其他數條意ヲ枉ケテ軍士ノ請ニ從ヒ  
 シカハ軍士一旦リージングニ退キケルカ都人

議院ノ甘シテ其制ヲ受クムヲ怒リ群起シテ軍士ノ猖獗ヲ罰セント請ヒシカハ軍士ハ兇徒ヲ驅逐シ議院ノ厄ヲ救フト唱ヘテ又軍ヲ進メ八月六日遂ニ都下ニ亂入シテ近者チカコロ議院ノ發シタル政令ヲ悉廢止シ市兵ノ士官及邑宰區長ノ類數十人ヲ獄ニ下シ又周郭ノ土壁ヲ毀テ一時凶焰壓ス可カラス時ニ議院ハ市兵ト陸軍ノ間ニ攝セラレテ一臂ヲモ揮フコト能ハス却テ報祭ノ日ヲトシテ其困辱ヲ免レタルヲ謝スト云フ是ニ於テ國內復コロン空ルニ抗スル者ナシコ

ロン空ル乃兵士ノ暴ヲ了知シ一日其檢閱ノ時ニ當テ急ニ賊徒ノ巨魁ヲ執ヘテ之ヲ責メテ曰ク汝等亂ヲ謀リ兇ヲ行フ其罪誅ス可シト之ヲ射殺シテ衆ニ殉ヘケレハ是ヨリ軍士モ亦肅然トシテ帽服シ敢ヘテ約束ニ違フ者ナシ○王ハジヨイスノ為ニ奪ヒ去ラレテヨリ常ニ兵隊ノ為ニ擁セラレ其到ルニ隨テ處ヲ轉レ八月二十四日軍士倫敦ニ入りシ後又ハンプトンノ離宮ニ移住シケルカ其防衛前時ニ比スレハ頗緩ニシテ起居稍便宜ヲ得タリコロン空ル以下亦時々



往來シテ其鬱悶ヲ慰藉シ此時諸將實ニ王ヲ放  
 ルスニ意アリシカ其言辭ノ携貳多ク契約ノ憑  
 信ス可カラサルヲ見テ終ニ其意ヲ絶ツト云フ  
 後四十餘日十一月十一日夜王守兵ノ怠ルヲ窺  
 ヒ偷ニ宮中ヲ逃レセント島ニ至テハンモンド  
 ト云フ者ニ寄リシカ不幸ニシテ此人又志ヲ議  
 院ニ通シ王ヲカリスブルーク城ニ奉シ竊ニ兵  
 士ヲ置テ之ヲ守ラシム王爰ニ在ルコト四十餘  
 日又書ヲ議院ニ寄セラ其哀ヲ請ヒシカ激徒之  
 ニ答ハス十二月二十八日王又逃ヒテ謀リ誤テ

身ヲ窓間ノ鐵竿ニ挿ミ守者ノ為ニ發覺セラレ  
 是ヨリ激徒愈警備ヲ嚴ニシテ悉ク其婢僕ヲ遠  
 サケ朋友舊故ノ如キ一切其來訪ヲ許サス千六  
 百四十八年ノ首ニ至テ遂ニ令ヲ下レテ曰ク爾  
 後王ノ言ヲ傾聽シ或ハ之ト交通スル者ヲラハ  
 反逆ヲ以テ論セント○蘇格蘭ノ教徒滋自主黨  
 ノ為ニ凌轢セラレテ日ニ相快ラス千六百四十  
 八年春密ニ使ヲセント島ニ送リ國ヲ舉テ王ニ  
 勤メント請フ英國ノ民モ亦コロシテ諸人ノ  
 為ル所實ニ國ノ為ニ非ルヲ見テ是歲ノ間王ノ

為ニ兵ヲ舉クル者少カラス時ニ世子チャールス  
 和蘭ニ在リテームス河口ノ戦艦十七艘其大将  
 フ陸ニ逐テ和蘭ニ至リ之ヲ舟中ニ迎ヘテ議院  
 フ討セントス又ラングダール及マスグラトリブ  
 ト云フ者二人各兵ヲ聚メテ英國ノ北部ニ起リ  
 其他都鄙ノ小民黨與ヲ嘯聚シテ之ニ和スル者  
 多シ七月蘇格蘭ノ將ハイルトン大兵ヲ率キテ  
 英ノ境ニ入リケレハコロン空ル之ヲ禦カント  
 テ自ヲ將トシテ北方ニ發行ス時ニラングダール  
 等聚ムル所ノ兵勢モ亦甚盛ナリ此輩北軍ト相

策應セハユロン空ルト雖恐ラクハ敵スルコト  
 能ハサラシテ兩軍各其教派ノ同シカラサルヲ  
 惡テ相助ケスコロン空ル此釁隙ニ乘シテ八月  
 十七日先ラングダールヲランカシール中アレ  
 ストンノ近傍ニ襲テ之ヲ破リ同二十日又ハ  
 ルトントコトクストルニ戦テ之ヲ虜ニシ是ヨ  
 リ直ニ蘇格蘭ニ進ミ數月ニシテ國內ヲ平定ス  
 是ヨリ先ハイルバックス兵ヲ率キテユル去スト  
 ルヲ圍ミシカ八月二十八日遂ニ之ヲ降シテ其  
 守將ムカス等ヲ射殺シケレハ全國再王ノ為ニ

唱フル者ナレ○此騷亂ノ間議院諸將ノ都下ニ  
 在ラサルヲ窺テ再々其羈絆ヲ免レント九月十八  
 日使ヲ王ニ遣テ諸州ノ兵ニカヲ戮セテ復辟ヲ  
 謀ラシコトヲ請フ然レトモ各深ク法教ニ拘執  
 シテ無用ノ辯論ニ時日ヲ費シ所々ノ王黨悉ク覆  
 敗スルニ至テ其議尚決セスコロシテ以下諸  
 將略既ニ騷亂ヲ平ラケテ後書ヲ議院ニ寄セテ  
 曰ク王久シク兵馬ヲ弄シテ遂ニ民ヲ塗炭ニ苦  
 マシメ其罪既ニ重大ナルニ議院之ニ與スルハ  
 是國ニ反クナリト之ヲ責メケレハ議院又諸將

ヲ反詰シテ曰ク妄ニ國權ヲ竊テ公會ノ命ニ從  
 ハサル者ハ其罪及逆ニ當セリ且王ノ言フ所苟  
 モ理アラハ之ト和スルニ於テ固ヨリ不可ナル  
 コトナシト然ルニ十二月五日衆員例ノ如ク議  
 院ニ赴クニ當テ軍中ハ一將ブライドト云フ者  
 大聚ヲ率キテ下院ノ前ニ在リ議員來リ聚ルニ  
 隨テ悉ク之ヲ拘留シ其說諸將ト同シキ者ニ非レ  
 ハ院中ニ入ルコトヲ許サス斯テ全議員ノ中ニ  
 就テ五十二名ハ執ハラレテ獄ニ下リ百六十名  
 ハ員中ヨリ除斥セラレ殘ル者ハ僅ニ五六十名

ニ過キス是ヨリ後ハ每事唯々トシテ只諸將ノ  
 意ヲ承奉シ議院ハ殆<sub>ト</sub>其名アルノミナリ○是ニ  
 於テ諸將聚會シテ後來ノ國事ヲ議シ従前ノ制  
 度ヲ廢シテ共和ノ政ヲ建<sub>テ</sub>ント一書ヲ作テ其  
 規模ヲ定メシカ之ヲ布行スルニハ先<sub>ツ</sub>王ヲ除カ  
 サルコトヲ得スコロンタル乃<sub>テ</sub>其意ヲ議院ニ諷  
 シケレハ十二月二十三日下院議案ヲ作テ曰ク  
 國王ト雖公會ニ對シテ兵ヲ舉クル者ハ其罪必  
 反逆ヲ以テ論ス可シト翌年一月一日其議案ヲ  
 上院ニ輸ス時ニ上院中ノ議員ハ殆散<sub>ハ</sub>シテ此

案ヲ決スル為ニ來會セル者僅ニ十六名アリ然  
 レトモ其論載スル所誣妄ヲ極ムルヲ憎テ之ヲ  
 卻ケ、レハ下院又暴論ヲ發シテ曰ク下民ハ國  
 權ノ原ツク所ニシテ下院之ニ代テ國事ヲ議定  
 スルニ何リ必シモ他人ノ許可ヲ待<sub>タ</sub>ント遂ニ  
 大ニ審官ヲ選ヒ是月二十日ヲ以テ王ヲ鞠問セ  
 ント期ス○是ヨリ先<sub>キ</sub>プライドノ議員ヲ淘汰セ  
 ル日ニ當テコロシタル別ニ人ヲ遣テ王ヲハン  
 プニール州中<sub>ニ</sub>ルスト城ニ移シケルカ其警備  
 更ニ一層ノ嚴ヲ加ヘ王ヲ暗室ノ中ニ投シテ守

卒ノ外ハ敢ヘテ来リ近ツク者ナシ斯テ王此地  
 = 在ルコト十餘日一夕寢ニ就クノ後庭外鏘マ  
 トシテ兵馬ノ聲アリ王怪ニ起テ人ヲシテ之ヲ  
 問ハシムレハハルリゾント云フ者又王ヲ奪ン  
 ドソールニ移サシト騎兵ヲ率キテ来リ迎フル  
 ナリ此夜王直ニ城中ヲ出テ、十二月二十二日  
 卒ンドソールニ到着シ是ヨリ翌年一月紀彈ノ  
 論決スル迄此ニ在リ是月十九日議院人ヲ遣テ  
 遂ニ王ヲ倫敦ニ迎ヘ其翌日審判ノ諸員悉ク  
 トミンストルニ會シテ始メテ王ヲ紀彈ス初審

判ノ人負ヲ定メシトキ兩院ノ議員陸軍將官及  
 通常法衙ノ官吏等ヲ合セテ百五十名ト為シカ  
 貴族ハ斷然其席ニ臨ムコトヲ肯セス法官モ亦  
 固ク其不法ナルヲ争ヒケレハ本日ニ至テ来リ  
 會スル者僅ニ六十九人アリ其中コロン空ルア  
 イルトンハルリゾン等首トシテ紀彈ヲ始メコ  
 クト云フ者全英國人民ニ代リ一書ヲ開キ王ノ  
 罪ヲ訴テ曰フ英國ノ人民キールス、ス左アルト  
 ヲ以テ其王ト選ヒ規畫セル政權ヲ以テ之ニ托  
 セシニ彼擅制横恣、政府ヲ創立セント謀リ漫

議院ト國民トニ對シテ兵戈ヲ動シタリ故ニ  
 今英國ノ人民彼ヲ以テ虐主、逆賊及我共和政府  
 ノ仇敵タル罪ヲ一身ニ累ヌル者ト為テ之ヲ訴  
 フト讀ミ終テ衆貞王ノ答フル所以ヲ問シカ臣  
 民タル者得テ其國君ヲ糾彈スルノ權ヲシトテ  
 王敢ヘテ之ヲ辨解セス良久シクモテ衆貞會ヲ  
 散レ二十二月再王ヲ廳前ニ召シ、カ王尚前論  
 ヲ執テ變セス是ノ如キコト前後三日ニレテ王  
 終ニ衆ニ許スニ審官ノ權ヲ以テセサリケレハ  
 二十七日ニ至リ激徒王ノ承認スルヲ待タスレ

テ獄ヲ定メ王ヲ以テ死刑ニ處セント決ス此間  
 蘇格蘭ノ人民頗ニ其悖逆ヲ争ヒ和蘭モ亦其間  
 ニ居テ勸解スト雖激徒并ニ之ニ從ハス時ニ世  
 子チャールス尚和蘭ニ在リ白紙ノ後ニ其姓名ヲ  
 書シ議院ニ寄セ哀乞シテ曰ク苟モ父ノ命ヲ救  
 フ可クハ其条約ノ如キハ唯命ノマ、ナリト然  
 レトモ亦聞カサル者ノ如シ是月三十日ヲ以テ  
 王ヲ刑スル日ト定メホリト、ホール  
倫敦中離宮ノ名  
 以テ其刑ヲ施ス所トシ殿前ノ庭上ニ刑臺ヲ設  
 ケテ兵士之ヲ環衛ス觀ル者四聚シテ堵ノ如シ

本日朝第十時軍士王ヲ驅テ宮中ニ入り午後第  
 三時又之ヲ擁シテ刑場ニ至ラシム王身ニ正服  
 ヲ著ケ儼然トシテ威儀衰ヘス場ニ臨テ傍人ニ  
 告ケテ曰ク近來ノ戦争ニ於テ余固ヨリ人ニ恥  
 ツルコトアラス今日ノ事ハ神只余ノ不徳ヲ罰  
 スルノミト語リ終テ其頭ヲ臺上ニ俯ス是日劊  
 手二人アリ各面ヲ掩ヒ其誰タルヲ知ラシメ  
 一人後ニ回テ其頭ヲ斬リシカハ一人高ク之ヲ  
 捧ケテ衆ニ視ヒテ曰ク此ハ是逆賊ノ頭ナリト  
 時ニ王年四十九在位二十五年三男三女アリ長

子<sup>ト</sup>ギールス次子ゼームス共ニ亂ヲ和蘭ニ避ケ  
 其他二女亦他邦ニ在テ英ニ留マル者ハ獨一子  
 ヘンリー一女エリサベッスノミナリ此時ヘンリー  
 一  
 年僅ニ七歳王死スル前日二兒守者ノ許ヲ得  
 テ王ト訣別セシカ王ヘンリーヲ膝上ニ抱キ其  
 頭ヲ撫レテ曰ク我死セハ衆或ハ汝ヲ奉シテ王  
 ト為シ然レトモ二兄尚在ラハ汝決レテ王タル  
 ヘカラストヘンリー王ノ顔ヲ熟視スルコト少  
 間ニシテ忽叫テ曰ク兒ヤ第一ニ寸斷セラレン  
 ト衛士為ニ淚ヲ流スト云フ

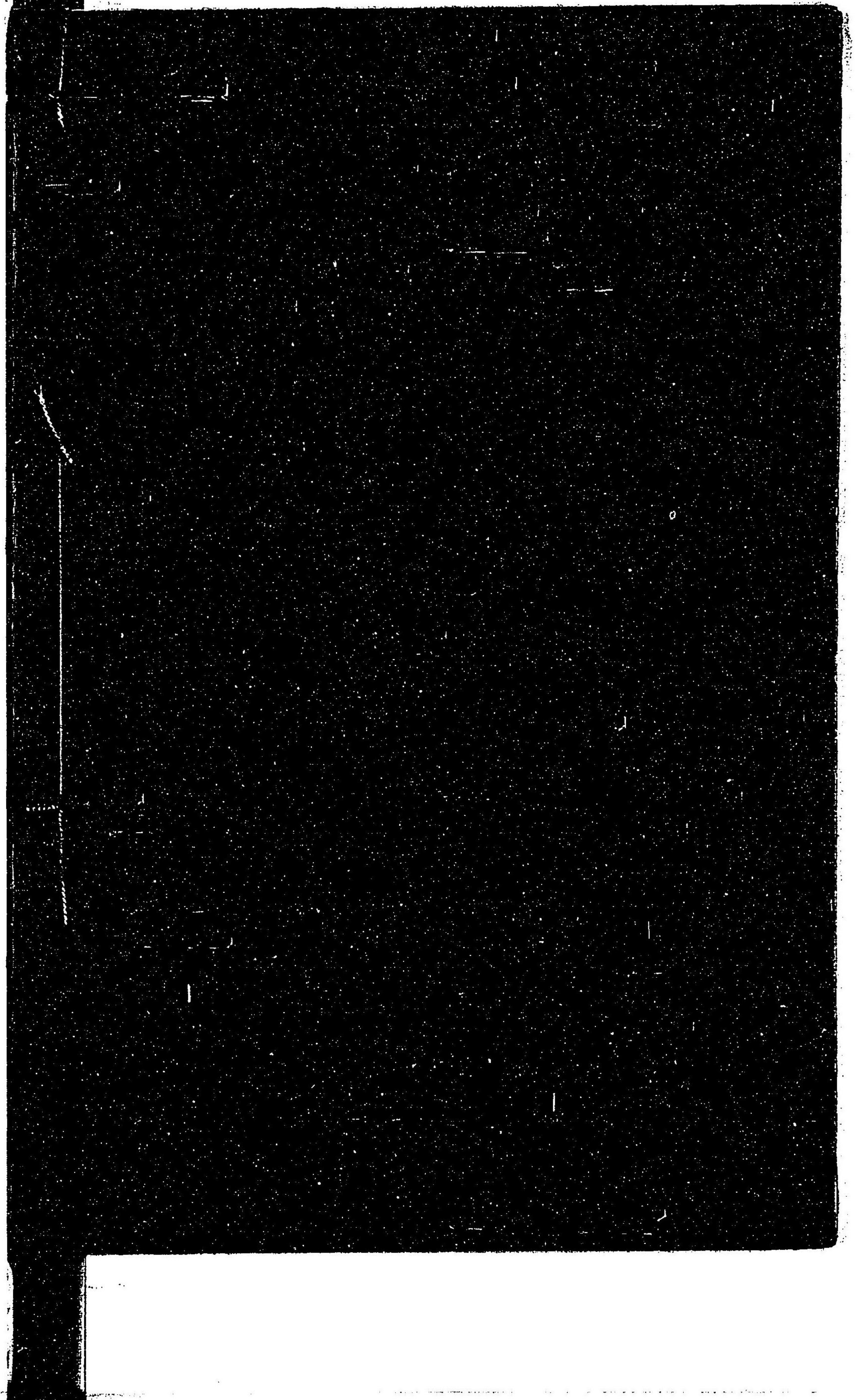
再版英史

文部省

今部亮校

改正英史卷六終





東泉園書韻

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
冊	卷	葉	函	扇	類				